

末黒野

すぐるの

12月号 (通巻880号)



函嶺

足元を霧のまつはり駒ヶ岳
秋冷や山頂統べて朱の鳥居
竜胆や湖に吸はるる山の風
山霧や湖面重たき色湛へ
芦の湖は函嶺の臍やかや
竜田姫湖上の鳥居潜り来る
散策や芒が原に袖濡らし
分け入るや流離ごころの芒原

松本三千夫

(名譽主宰)

小鳥来る

黒滝志麻子

(主宰)

水澄むや魚それぞれ影を曳く
語部の深きまなざし虫の秋
街を往く路面電車や野分晴
どの家も山を背にして柿の秋
瓢箪のぶつきらぼうに吹かれをり
烈風の湖のひかりやななかまど
秋燕や山より風の育ちきて
銜して鎌倉山の秋澄めり
爽やかや北鎌倉の朝の駅
ゴシツクの洋館の窓小鳥来る
沼二つありて二つの秋の暮
子の刻に覚めて飲む水鉦叩

彩雲

楯となす外輪の山稻の花
木道につづく木の橋葛の花
雲影の撒かるる湖や秋はじめ
かなかなや殊更のことなきひと日
切れ目なき媼の話鳳仙花
吸物に花麩を母の敬老日
しなやかなる影を自在や秋桜
彩雲を伴ひ出でぬ今日の月
執心の黄の一輪や秋の蝶
筆先を浮かせるままの秋思かな
零さじと掬ぶ懸水実紫
鉄条に休止符ならべ赤とんぼ

森

清

(副主筆)

堯

甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）

十六夜の日

安齋久英

小半刻雲の行方を追ふ秋思
秋意濃し沖の白波立ち上る
曼珠沙華畔を真紅の一塗りに
十六夜や沖の白波きらめける
山の日の頂とみに星増ゆる
行く秋や安房の稜線くつきりと
秋深む忽ち暮るる基地の空
十六夜や生絹の雲をまとひつつ
秋落暉次々変はる雲のさま
海峡を水道と呼び秋深む

鹿の声

石黒興平

兎の顔も声も濡れをり水遊び
結婚式平服のこの涼しさよ
帰省して佳き事ばかり甦る
源流にこもる山気や鹿の声
秋めくや岩をさ走る水の音
軽トラの出入り残暑の魚市場
音の無く降り出しにけり処暑の雨
大いなる空の風紋鱗雲
熊除けの鈴の余韻や夕花野



ばつた飛ぶ

岡野里子

欄干の鉄の熱さや原爆忌
風を待つ港の風車秋暑し
角円き小振りの名刺涼新た
早暁の秋涼を繰る雨戸かな
門火青し焚き付けにせる広告紙
風と降り風と発ちたり稲雀
源流へ沢音辿り秋澄める
風凧ぐや酔ひまだ浅き酔芙蓉
半ば巻き茶屋の二階の秋簾
飛び石は妣の挽白ばつた飛ぶ

ばつた飛ぶ

菅野日出子

秋の蚊や古寺に借りたる外厨
雲梯の鏝の蹟や休暇明け
志野焼や甘酢きかせて菊脛
セピア色の兄の遺影や敗戦忌
非通知の電話ばかりや秋時雨
大櫓に鳥のひそめり台風裡
台風のそれでひと刷茜雲
ビル群の影黒々と秋夕焼
とろろ汁するりと逃げて塗の箸
燕去り薄暮の愁ひ深めけり

台風裡

田中臥石

神田川秋日に低き芭蕉庵
立像の蕉翁照らす晩夏光
秋風に江戸更紗干す神田川
玻璃戸透く径のカンナのほむら揺る
停電の庭の闇よりちちる虫
停電を手探り歩く夜半の月
停電の断水長き残暑かな
倒伏の稲穂や並ぶ給水車
残暑なほ水飲む喉や恙妻
自衛隊来て給水す秋しぐれ

かなかな

森清信子

椰子の木の空へ直立炎天下
滴りに耳研ぎ澄まし石仏
夜の蟬色の褪せたる句を捨てて
広島忌とはに忘れじ黙るまじ
籠に盛る葡萄とりどり聖句添へ
新涼や鏡光りの湖の面
かなかなや終はりのかなの切字めき
スクラムに投げこむボール天高し
大花野両手をあげて駆け出す子
隠岐早も色濃く更けぬ天の川

乙 矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）



花野 高木邦雄

拾ひけり虚子の投げたる金亀子
一位の実の一粒甘し一の宮
掌に余る母郷の桃や香の甘き
川音の出で湯の宿や望の月
五百重波帰燕の群の遥かなる
潮の香の岬の花野風の私語
安達太良の真青なる空秋茜

紅木権 堺 昌子

敗戦忌 今村千年

みんみんの途切れぬ山路雨きざす
白糸の滝への道や芹の花
向日葵の皆東向き日は西に
友よりの木槿の紅や咲き競ひ
あぐる手の揃ふ揃はぬ盆踊
子供らのとんぼ追ふ目や夕焼雲
花かぼちや山の畑をこぼれ咲き

悲しみは言はず黙禱敗戦忌
考洗ひ妣を洗ひぬ墓参
裏木戸を開くや確と秋の色
今生の限りを鳴きぬ秋の蟬
近くゐて遠へ嘶く秋の駒
日燦燦木蔭に入るや秋の風
旅鞆にいつも歳時記草の花

草の花

及川照子

終戦忌のサイレン重き亭午かな
言の葉の発酵を待つ夜長かな
瓜坊の戯れ合ふ編の産毛かな
恙なく世を永らへて草の花
ともがらの目差やさし草の花
草の花背筋のぼして生きむとす
廃屋は絵画となりぬ蔦紅葉

星月夜

大川暉美

神木の放つ生氣や涼新た
大空と蝦夷の大地や稲の波
秋雲を裂きて蝦夷富士聳てり
露天湯に心委ねて星月夜
山並の影をダム湖に秋澄めり
秋の日や波の綾なす札幌湖
畦道へ一步止みたる昼の虫

青瓢

岡田史女

惜命の蟬のしきりと広島忌
醉芙蓉亡き師のことを妣のことを
爽籟や庭師の小さき花挟
山よりの風を集めて青瓢
胸に手を置きて寝るくせ鉦叩
抜きんづる者なき家系天の川
天高し風車は風を待つてをり

豆腐の水

小田嶋野笛

音で診る店主の見立て西瓜売り
立秋の豆腐の水に翳すこし
直ぐならぬ辻や初風音も無く
索餅は尼の持て成し夕晴れて
うつすらと女星男星や嵐山
UFOに遭つたこと無し夜這星
無駄多き暮しや秋の金魚飼ひ

海桐の実

加藤静江

黒潮の逆巻く眼下海桐の実
岩壁に立つ大風車秋の蟬
万緑の影の重なる深さかな
堰音の高まる寺領竹の春
朝涼や魚影と紛ふ水の皺
置き石は大理石なり一葉落つ
湧水の脈打つ水面豊の秋

流星

斉藤マキ子

どの星座よりこぼれしか星流る
粗塩にかすかな甘味涼新た
布を裁つ鋏の音や夜半の秋
姉の忌の一壺に秋を集めけり
葛覆ふ少年の日の秘密基地
蒸し焼きの魚の目濁る厄日かな
あちこちが痛くて元氣敬老日



青炎集

黒滝志麻子選



横浜 山口郁子

秋天をふるはず鳶の笛高し

衿元の風ひんやりと秋めきぬ

障子貼りひとりの手には難儀なる

咲きたての素の色さやか酔芙蓉

わけありの秋茄子並ぶ直売所

筋書きのなきショーみせて今日の月

横須賀 福田禎子

遠山に心遊ばせ夕端居

我が左脳溶くるがごとき酷暑かな

海は秋波ゆつたりと磯洗ふ

寄る波の岩打つ音や秋の声

秋初め岬へのバス客二人

駅前揉み合ふ神輿秋夕べ

横浜 柚木 澄

初蟬や一鳴き朝の散歩道

スリラーの犯人を追ひ明し

朝戸練り梅雨明くる日の待ち遠し

バス待つや桜並木の蟬時雨

梅雨出水道を川とし轟轟と

電柱の片蔭拾ひバスを待つ

横浜 神谷さうび

流木に腰を下ろすや秋の声

砂を噛む足音ばかり浜の秋

古民家の小暗き土間や昼ちちろ

思草思ひ思ひの方を向き

かなかなや大樹の梢に日をとどめ

石階の白々とあり秋早

横浜 太田良一

引く波や浜辺に残す秋の声

唐黍や白い齒並の離島の子

汽水湖の水の松江よ水の秋

敗荷や数万本の朝の日矢

秋の灯の出船入船船だまり

山裾の低き鳥居や小鳥くる

横浜 饗庭恵子

茄子漬の紫紺色濃き今朝の幸

日暮まで束の間のあり酔芙蓉

葉鶏頭谷戸の夕日に燃えあたり

米櫃に米を満たすや敗戦忌

今朝の秋寛の音の高まりて

ねこじやらしの首振りやまず分譲地

横浜 岩上行雄

地の火照り歳時記すでに残暑なり

杖二本あやつる散歩生身魂

台風やB29の進路とも

先駆けの児のつと止まり蚩草

買ひては積み借りは読みつぐ夜長かな

原三漢の遺業のあまた秋気満つ

横浜 小沼糸み子

地下街より残る暑さの街へ出る

風にぎり風を放して盆踊

廃屋を重機の噛むや秋暑し

目薬の一滴しむや終戦日

旅さやか妻籠みやげのお六櫛

名札つけ区長の講話秋扇

横浜 片岡さか江

虹二重足止むる人みな笑顔

朝挽ぎの茄子のむらさき水弾き

秋暑しどこへも行かず何もせず

黄昏の街秋蟬のはたと止み

坂道の先に彩雲花木槿

包丁の音かるやかや厄日過ぎ

横浜 新井八重子

日の強き一日に耐へ水を打つ

暗き部屋落ちつきにけり秋簾

秋澄むや鳴き交はし行く夕鴉

厚切りも焦げも望みや茸飯

草倒れ漬く濁流や台風過

水引きや風の意のまま紅ゆらし

実千両

小川玉泉

(名誉顧問)

朝採りの秋茄子艶の衰へず
隣人と話はづめり吾亦紅
紅と白鉢それぞれに実千両
菜園の秋惜しむかに小さき蝶
枯れ切つて影の直ぐなる紫苑かな
暮れ早し全市を包む時の鐘

雑記帳 29

国際情勢が急速に悪化しており心配に思う。
身勝手ながら、此の号をもって退会させて頂くことにいたします。皆様のご健勝とご多幸をお祈り申し上げます。